

47 明治12年群馬県邑楽郡川俣村のコレラ騒動について

誌上発表

—明治前期のコレラと流言—

須長 泰一

伊勢崎市

明治10年以降、全国規模のコレラ流行が頻発した。最も規模が大きかったのは、全国の患者数162,637人、死亡者数105,786人に及んだ明治12年の流行であった。明治12年3月、愛媛県魚町で発生したコレラ流行はまたたく間に全国各地へと伝播し、その年の12月下旬まで継続したことが知られている。コレラの蔓延防止策として、患者を避病院に隔離、石灰酸散布による消毒、死亡遺体の火葬強制、交通遮断等が実施された。患者の収容・隔離は警察により行われ、強圧的な対応は民衆の反発を生むことになった。東日本の患者数は西日本に比べて少なかったが、民衆との軋轢から、発生した衝突や暴動いわゆるコレラ騒動は西日本より多かったことが指摘されている。こうした混乱を増大させた要因と考えられるものに流言の拡散がある。その典型例と考えられる群馬県邑楽郡川俣村(現明和町)で発生したコレラ騒動について、『栃木新聞』と『郵便報知新聞』の記事から、その概要を紹介する。

8月12、13日頃、川俣村ではコレラ患者が発生し、村医の治療を受けていた。その当時、村内では「一々病院に入れ治療と名を付け、実は右の患者を殺害して、胆を取り米客グラント氏へ高価に売り渡すの内約あるが故に、政府は医員巡査に内命を下して故らに人を殺す」という噂が広がっていた。こうした中、医員がある患者に水薬を与えたところ、患者は苦しみ、即座に死亡する事態に至った。これを機に医員と巡査への疑念が高まり、これ以降、村中の者は医員の診察は一切受けないと決めた。8月18日、医員と巡査は診察を拒んだ者への説得に出たが、耳を貸す者はなく、巡査らは帰路に着くが、村人は「人殺しを逃すな、打ち取れ」と鐘を鳴らして騒ぎ、医員と巡査を追撃し、郡内17村1,300人が集結する騒動になった。間一髪、難を逃れた検疫医員は館林警察署に報告した。郡長は鳶人足を掻き集め、蜂起勢との交渉に向かい、蜂起勢は1. コレラ患者は検疫医員の診察を受けず、適当な医師による治療を受ける。2. 避病院への入院は拒否する。という要求をした。これに対して、郡長が県に取り次ぐという約束で合意に達し、蜂起勢は解散した。以上が川俣村で起こったコレラ騒動の顛末である。この流言の中で言及された米客グラント氏とは米国前大統領グラント氏のことで、国賓として来日中であつた。関東地方ではグラント氏をモチーフにした流言が広範囲に拡散していたと考えられ、埼玉県北足立郡東本郷村や神奈川県横浜区でも、川俣村と同様、グラント氏に関する流言が騒動の引き金になったことが知られている。

明治10年のコレラ流行の際にも、流言は確認されていて、千葉県長狭郡貝渚村でコレラ患者の治療にあつた医師沼野玄昌が漁民らに殺害された事件があり、この時には「井戸に毒を入れ、患者の肝玉を取る」という話が知られている。明治12年のコレラ流行では、7月下旬、愛知県知多郡内の村々では「県庁の役人等が外国人の注文を受け生肝と白骨を取らんと、石灰酸緑盤と云う如き毒素薬を井水に滴らして、コレラ病に取付かせ、避病院に送り込みてムザムザ殺す」という流言が拡散し、強圧的なコレラ対策に対する不信感を反映した話が展開されている。まだ特定の個人名はなく、外国人とだけある。さらに「白骨を取る」は沼野玄昌が人体骨格標本作成を目的に引き起こした死体発掘事件を投影したものと推測される。7月から8月にかけて、石川県金沢区では、「夜中〇〇が毒を撒布する」、「患者に魔薬を与ふる」、「鮮血を絞り、肝を抜く」のように、噂話として断片的な状態で広がっていた。8月5日、新潟県西蒲原郡新潟町では、「避病院では生きている人間の生肝や生き血をと外国に売る」、8月7日、新潟県中蒲原郡沼垂町では、「死人が多いのは死なない者まで殺してしまうためらしい。生肝を取ってアメリカに売るため、どうやら警察があやしい。」のように、外国からアメリカへと変化している。最終的にはグラント氏をモチーフにしたより真実性を感じさせる物語へと変貌し、関東地方で拡散したと考えられる。